令和８年度第２回地域福祉計画推進会議　会議録

1. 開催概要

日　　時　令和 8 年 9 月 29 日（火）

場　　所　川崎区役所 10 階会議室

出席委員（敬称略）

飯嶋委員(川崎市南部基幹相談支援センター　職員)、児玉委員（大師地区老人クラブ連合会 会長）

七條委員（あいせん保育園　園長）、寺崎委員（川崎市介護支援専門員連絡会　川崎区支部長）

中島委員（しおん地域包括支援センター　センター長）、服部委員（川崎市川崎区社会福祉協議会　事務局長）

牧岡委員（共育ひろば主宰・社会学博士）、三ツ森委員（川崎区民生委員児童委員協議会 副会長）

宮越委員（川崎区地域教育会議　議長）、渡邊委員（川崎区医師会　総合川崎臨港病院 理事長）

事 務 局

山﨑区長（川崎区役所）、町田所長、若尾副所長（地域みまもり支援センター）

早川課長、平井係長、柴田（地域ケア推進課）

ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ

曽我課長（地域支援課）、笹島課長（高齢・障害課）、紙屋担当課長（保育所等・地域連携担当）、

成沢課長（企画課）

2. 議題

（１）第８期川崎区地域福祉計画の進行管理・評価の考え方について

（２）川崎区地域福祉計画の周知の手法について

（３）情報交換等

（４）その他

3.配布資料

会議次第

会議次第

川崎区地域福祉計画推進会議委員名簿

川崎区地域福祉計画推進会議開催運営等要綱

資　料　１　　第８期川崎区地域福祉計画の進行管理・評価の考え方について

資　料　２　　川崎区地域福祉計画の周知の手法について

参考資料１　　第８期川崎市福祉計画体系（案）

参考資料２　　川崎区地域福祉計画（素案）

参考資料３　　第８期評価イメージ

参考資料４　　独自ツールの構成イメージ

4.意見要旨

資料１に沿って、評価の考え方について事務局から説明を行い、内容や評価について意見を求めた。

（牧岡委員）
理念が「深まる」ではなく「進化」なのが少し気になる。

（早川課長）
次期計画は取組の一覧ではなく、変化を見ながら改善できるサイクルで地域福祉を進めていくことを目指している。その点では、「進化」という表現が適切だと考えている。

（牧岡委員）
この間、カレーサロンを見に行き、どういう経緯で人が増えているのかを観察した。他の場面で知り合った人を誘って参加している人がいて、当事者である参加者自身が人を呼び込み、賑わいにつながっていた。ただ、こうした変化をどのように拾い上げ、言語化していくのかが、今回の評価の視点で重要な点になってくると感じた。
こうしたつながりは「進む」というよりも「深まる」と言えるのではないか。地域福祉の推進についても、「深まる」という段階に入ってきているのではないかと思う。小さな変化をそうした観点から見ていかなければ見落としてしまう。
人を紹介する行動の背景には、「つながっていたい」「良い体験を共有したい」といった気持ちがあり、そのような心の動きを拾い上げて言語化することが評価において重要ではないか。こうした心の動きは見ているだけでは分からないため、その場にいる人に話を聞きながら拾い上げていくことが必要だと思う。それを評価として伝わるように言語化していく必要がある。どういう人に来てほしいのかを逆算しながら見ていかないと、変化を見落としてしまうし、アンケートも実施するだけで終わってしまう。

（飯嶋委員）
事前アンケートと事後アンケートが重要になってくると感じた。変化を見ていくためには、どのような変化があったのかを確認するために前回の結果と比較する必要がある。取組自体も１回実施しただけでは効果が見えなくても、後から徐々に結果として現れてくることもある。変化を拾うために地域に入り込めるよう、企画する側がしっかりと工夫していかなければ難しいと感じた。

（牧岡委員）
当事者というか、支援を受ける側の動きがもう少し見えると良いのかなと思った。もう少し地域に入りこめるような手法があると良いのかなと。

（早川課長）
口コミが横展開していても、それが表にでてくることはそう多くない。個々の視点が見えにくいので、そこが見えてくるとより、行政だけではなく地域で支えているということが分かりやすくなってくる。

（児玉委員）
高齢者の人口が 3 割を占めており、100 歳以上の人口も増えている。高齢者に対する取組をもっと増やしてほしい。保健師や地域包括支援センターを増やすなど、具体的な話があった方が分かりやすい。高齢者をどう盛り上げていくかを考えてほしい。老人クラブに何が足りないのかアンケートを取ったり、連合町内会等の会合では様々な意見が出ていると思うので、そうした声を吸い上げたりしてほしい。

（七條委員）
以前は、保育園は保育園、民生委員児童委員協議会は民生委員児童委員協議会というよう

に、それぞれが個別に活動していたが、最近、渡田保育園で保育園と民生委員・主任児童委員との情報交換会を行った。皆が地域につながっていない人を心配していた。イベント等に足を運んでくれる人はいるが、継続的に参加してくれる人はなかなか増えず、口コミによる広がりを期待しているものの参加者は少ない。園庭開放についても、なかなか人が来ずガラガラの状態である。保育園は不審者対策として門を閉めているため、敷居が高くなってしまっている面もあると思う。保護者同士だけではなく、保育園や地域が連携しながら心配な人を見守っていけるようにしたい。

（宮越委員）
計画の中でも「つながり」がキーワードになっていると感じた。富士見公園の冒険土の広場を運営しているが、そこはオープンスペースであり、ふらっと立ち寄って遊んでくれる子どもや乳幼児、外国につながる子ども、障害のある子どもも来てくれている。遊びが楽しくて来てくれているが、その中で自然とコミュニケーションが生まれている。遊び道具をあえて多く用意していないからこそ、そこで遊びが生まれたり譲り合う姿が見られたりしており、コミュニケーションにつながっているため、「場」が持つ力を感じている。上手く声をかけることでつながりが生まれていると感じる。外国につながる人にはそれぞれのコミュニティがあるが、それ以外の場はあまりない。地域の中に「場」があることで人が集まり、コミュニティが生まれている。皆にもこの場をうまく活用してほしいと思う。

（牧岡委員）
最近は仲間が一度できると閉じた関係になりがちである。みんなの輪の中に引き込んでくれるような人が１人でもいると違う。そういう人を増やしていく必要がある。

（三ツ森委員）
民生委員では子育てサロンを実施しているが、広がりをつくることは難しいと感じている。赤ちゃん訪問の際にはチラシを持参して配布している。小田地区の子育てサロンでは２歳児まで受け入れている。サロンには区役所の保健師が話に来てくれたり、小田保育園など近隣の保育園から保育士が遊びに来てくれたりしている。保護者同士のつながりを大切にしたいと思っているため、スタッフが「赤ちゃんを見ているので、少しお話してみてください」などと声をかけ、つなぎ役になれるよう心掛けている。

（早川課長）
昔は集まる場さえあれば自然とコミュニケーションが生まれていたが、今はグループと言っても少人数での集まりが多くなっている。そのような中で輪を広げるためにはナッジではないが工夫が必要になってきている。宮越委員や三ツ森委員のお話にあったような、小さな工夫も拾い上げられるようにしていきたい。

（牧岡委員）
そういった工夫をモデル的な形で実施して広げていけるといい。

（早川課長）
いままでも、そうした想いを持った職員が工夫を重ねながら実践してきたとは思うがそれを拾い上げて横展開していくことはできていなかった。今回の計画から実践できると良いと思っている。

（服部委員）
計画の話を聞き、目指す変化を方針毎に細分化しているのは良いなと感じた。社会福祉協議会としても参考にしながら活動を進められるのではないかと思った。地区社会福祉協議会にも共有していきたいと感じた。評価の例にも記載があったとおり、高齢者であれば自分事として捉えやすく、情報発信もしやすいが、福祉と接点の少ない若い人については、積極的な

つながりが生まれにくいと感じているので、接点をもてるように工夫していきたいと思っている。

（牧岡委員）
評価作業を住民や地域のキーパーソンと共有できると良いのではないか。そうすることで評価がより立体的になるのではないか。

（服部委員）
目指す変化があることで、その変化を把握するためにアンケートを取ろうという発想につながるため良いと思う。一方で、全てを把握しようとするとアンケート項目が増え、回答者の負担が大きくなってしまう。

（早川課長）
その点についてはバランスを見ながら、取組ごとに目指す変化を考えていきたい。また、出前講座を例にとると、参加者側のアンケートだけではなく、主催者側への聞き取りも重要だと感じている。

（渡邊委員）
１つ１つの取組自体は悪いものではないと思うが、川崎区全体のムーブメントにつながるような計画には見えなかった。評価についても、言葉による評価だけではなく、最終的には数値による評価も必要になると思う。また、その数値をアンケート調査のみに頼ることには疑問を感じている。
現在は ChatGPT や Claude などの AI ツールも活用できる時代であり、参加者の属性や行動、反応などをデータとして把握することも可能になっている。重要なのは、参加者が初めて参加した人なのか、継続的に参加している人なのか、またどの地区から来ているのかといった情報を把握し、数値として分析することで次の目標につなげることだと思う。
例えば、ある取組に特定の地域の人が多く参加している場合などは、その背景や地域課題を分析して初めて意味が生まれる。良い取組を実施したから評価が高いということではなく、その取組が地域にどのような変化をもたらしたのかをデータから検証することが重要ではないか。
民間企業であれば、目標やターゲットを設定し、マーケットを分析した上で事業を展開していく。地域福祉においても、活用できるデータを分析しながら、その年に取り組むべきことを検討していく必要があると思う。市の目標と区の目標をどのように結び付け、区の課題をどのように落とし込んでいくのかを整理しないと、今後の方向性が見えにくいのではないか。

（牧岡委員）
手法の問題について大きな課題が出てきた。

（渡邊委員）
今回この計画で進めるとしても、今後どのように評価し、改善していくのかを今の段階からしっかり検討しないと、同じことを繰り返すだけになってしまう。評価３や評価２が続いても、区が何を変えられたのか分からないまま終わってしまうのではないか。
医療分野では AI 等を活用して参加者の属性や発言時間などを分析する取組も行われている。アンケートだけではなく、客観的なデータを活用することで見えてくるものもあるのではないか。こうしたツールをどのように活用していくかを考えることも重要だと思う。

（早川課長）
可能性としてはあり得るが、技術的に難しい部分もある。個人情報の観点もあるので、参加者のデータを取るのは難しいこともある。なにより市民との信頼関係が大事だと思っている。

（牧岡委員）
AI を活用するという視点は重要だと思う。大きな課題ではあるが、データとして活用できるものについては検討していくと良いのではないかと感じた。ただ、第８期以降の課題になるかもしれない。今までは自分で情報を集めようとしていたが、そうしたデータが活用できると良いと思う。工夫の余地はあると思うので、みんなで頭をひねって考えていければよい。

（2）川崎区地域福祉計画の周知の手法について

資料２に沿って周知手法について事務局から説明を行い、意見を求めた。

（牧岡委員）
当事者の支えられる側の声もあるといいなと思った。また、「ちけあ」という言葉がどこまで伝わるのかという点は気になる。

（宮越委員）
「ちけあ」という言葉を覚えてほしいという気持ちが前に出過ぎてしまっているのかなという印象はある。行政としてはいろんな世代に目を配らないといけないのかもしれないが、誰に向けて何を発信したいのかがポンと入るようなキャッチがあるといいなと感じる。

（早川課長）
去年度から地域包括ケアシステムは「地域のつながり支え合い」と言い換えて伝えてきた。一方で、「地域包括ケアシステム」の理解浸透を図るためには、地ケアや地域包括ケアシステムという言葉を使っていかなくてはいけないということもある。地域のあの人がしている活動が、地域包括ケアシステムにつながっているのだということが少しでも伝わるようにしたいと考えている。

（牧岡委員）
地域包括ケアシステムという言葉を言い換えようとしてしまうと逆に言葉が増えてしまって分かりにくくなってしまうのかなとも思う。

（早川課長）
インタビューを追加したいと思っていて、前回の会議でも飯嶋委員より、障害当事者の生活があまり知られていないというお話もあったかと思っていて、その点どのようにお考えか聞きたい。

（飯嶋委員）
最初にお話をお伺いした時は自立支援協議会が良いかと思っていたが、今は支援者側の集まりになってしまっているので、そこにインタビューをしても当事者の顔は見えてこないかなと。なので、今現在活動しているボッチャ大会や障害者スポーツ大会、アート展、地域活動支援センター等へのインタビューが良いのではないかと感じた。一番もったいないのは、支援者の話だけを載せてしまうことかなと。せっかくなので地域生活が見える形で載せてみなさんに興味をもってもらえるといいなと。また、宮越委員の富士見公園の冒険土の広場に障害のある人や外国につながる人が集まって泥んこ遊びしているとのことだったので、そういうところにインタビューをしても多文化共生の縮図みたいで見てても面白いかなと思った。

（牧岡委員）
車いすでまちにいる風景があるといいのではないかなと。

（飯嶋委員）
身体障害であれば分かりやすいものではあるが、障害は身体的な話だけではなく、知的や

精神の障害もある。作業所等で作業をしているところ等をフォーカスして、そこで作っているものが地域の人にとって身近なものだったりすると良いのかなと思った。

（渡邊委員）
少しでも手にとる人を増やしたいという目的でインタビューを載せるのであれば、その人にフォーカスを当てないと意味がない。掲載されている人を目当てに見て初めて他のページを見てもらえる可能性が出てくる。団体の紹介をここでしてもしょうがない。地域の当事者にスポットを当てる方が良い。

（3）情報交換

（児玉委員）
高齢者支援に力を入れてほしい。年々スポーツ大会への参加は減ってきている。マンネリ化しているところもあると思うが種目を増やしても長時間になってしまうのでなかなかできない。ボッチャはかなり増えている。今までやっていなかった町会がやったりしている。話し合いの場や交流の場を欲しがっている人も多い。みんなつながりが欲しいと思っている。そういう場をもっと増やしてほしいなと思う。

（七條委員）
いま、保育園の園児にベトナム北部出身の方が多いが、来年度から南部の人が入園することを不安がっている。ベトナムといっても北部と南部で大きく文化が違ったりする。いろいろな国籍の人が増えている中で、難しい部分も出てくるが工夫していきたいと思っている。

（寺崎委員）
みなさんの話を聞いて、場の大切さを改めて感じた。施設の拠点で子ども食堂を実施したりしている。最近ではマルエツの移動スーパーを呼んでいる。入居者にはとても好評だが、地域の人はなかなか来てくれない。町内会長には情報提供しているが、難しいなと思っているところ。週１回店舗価格で販売してくれているので、地域資源になり得ると、話を聞いていて思った。

（牧岡委員）
鋼管通にもとくし丸が定期的に来ており、拠点になっている。買わない人も集まったりしているのでそういう場になると良い。

（服部委員）
社会福祉協議会でも地域福祉活動方針を各区で作成している。本日聞いた目指す変化も取り入れていきたい。また、最近の地区社会福祉協議会の動きとして、大師地区ではボッチャ大会が行われており、先日も大師第２地区社協が主催で小学校にてボッチャ大会が行われる等、ムーブメントになっている。

（宮越委員）
夏休みに小学生と６０人くらいでキャンプに行った。五感を使った遊びをした。初めての泊り行事の子どももいて良い経験をしてもらうことができたと感じている。夏には中学生の地域体験活動も行った。中学生たちが良い働きをしてくれて、受け入れ先も喜んでくれた。七條委員のあいせん保育園にもご協力いただいたが、卒園生が参加してくれ、とても良い体験になっていた。今年で３回目で１０人ずつ毎回増えている。

（三ツ森委員）
今度民生委員児童委員協議会２２名で海老名市に視察に行く予定。海老名市の民生委員児童委員協議会から良い点を吸収したいと思っている。

（渡邊委員）
インフルエンザやコロナが増えているのでワクチンを打ってほしい。今は自宅でチェックできてしまうので、若い世代の人は陽性だと病院にさえ来ない。病院で検査してしまうとバイトに行けなくなってしまうので、病院には行かずバイトに行ってしまう人も少なくない。これが今の現状なのでみなさんも気をつけてほしい。

（牧岡委員）
渡邊委員に聞きたいことがある。いま、川崎にはどのような患者会があるのかどのくらいあるものなのか。

（渡邊委員）
うちの病院ではもっていないが、大島地区でいうと難病患者の会であるミモザの会がある。

（牧岡委員）
随分前ではあるが、東京都港区のあたりでパーキンソンの患者の会の立ち上げに協力したことがあったのだが、最近、大島でパーキンソンの方がいらして、患者会はこっちにはないのかなと思って。

（渡邊委員）
認知症の会はあるが、他の患者会はあまりないのではないか。

（飯嶋委員）
精神病の家族会は各区にある。

（牧岡委員）
当事者の会というか当事者が発信して、周りが面で受け止められるといいなと思っている。そういう動きがまちの中に生まれると良いと思う。

（渡邊委員）
八王子の方では病院では、まつりやバザーを開催して地域に開いているところもある。イベント開催が目的ではなく、地域の人にそういう病院があるのだということを知ってもらうことを目的にしている。最初はまつりが目的で来る人が多いが、気づきにつながる取組になっている。地域の人たちのつながる場になっている。

（中島委員）
渡邊委員の「素材はたくさん転がっていて、そのデータをどう上手く活用するかが大事」という話がとても勉強になった。包括の新規相談件数を介護保険非認定の高齢者数で割った数値を出すことで、地区ごとの包括へのアクセス性がデータで分かった。それを先日の圏域会議で地域の人に見せたところ、民生委員さんから好評で同様のデータを見たいと言っていただいた。計画素案の「データから見えてくる川崎区」等は地域の人が欲しい情報だと思うので活用していきたい。

（飯嶋委員）
障害分野でも、当事者・保護者ともに外国ルーツの方が増えている。何が大変かというと、福祉用語が難しく、翻訳が上手くできなくて伝わりにくいということ。「ふれあい」含め福祉のリーフレットや申請書類は日本語のものしかない。申請書の記載例だけでも翻訳できるといいなとも感じている。自立支援協議会でワーキングを立ち上げる話？実際に当事者が何に困っているのか分からないので、ふれあい館にも協力してもらいながらインタビュー調査等をしていきたいなと思っている。

（早川課長）
今年度から区で実施している通訳・翻訳事業が福祉に関する内容であれば子どもだけではなく全

年齢対象となったので、ふれあい館に翻訳をお願いする場合は、ぜひこの事業を活用してもらえればと思う。

（飯嶋委員）
Google 翻訳も精度が高まってきているとは思うが、福祉用語の翻訳にはまだまだ課題が残るところなので、そういった資源を活用させていただきながら乗り越えていきたいと思っている。また、芸術の秋ということで、障害のある人たちのアート作品募集が始まったりしていて、普段なかなか関わることがない自閉症の方が描かれた素敵な絵等が集まるので、みなさんにもぜひご覧いただけると嬉しい。

以上